

第2号 宮城チーム

現地支援委員会ニュースレター

〇仙台教会 〇山形教会 〇大富教会 〇南光台教会 〇吉岡伝道所 〇山形教会 〇酒田伝道所



祈りの課題

- ◆半年が経った被災地において、疲れや歪みが生れている場所に主の寄り添いがあり、被災者の生活と心が守られますように。
- ◆宮城チームの教会・伝道所の歩みと信仰が支えられ、被災者支援の働きが共に福音に与る歩みとなりますように。

宮城チームの教会・伝道所の最近の活動報告

仙台教会

南三陸の戸倉中学校に、冬に備えてストーブの提供を行うなど、継続した寄り添いの働きを行なっている。また、石巻の小学校支援や、宮城チーム企画の石巻牡鹿半島支援にも積極的に取り組み、9月から着任した小河牧師や「チーム・キタヨシ」を中心に幅広く活動している。

仙台北教会

亙理町の宮前仮設住宅の支援を月に2回のペースで行なっている。85世帯分の支援物資を届けながら、支援する側と支援される側の壁を越えた、相互の交わりとなる働きを模索している。特に、仮設住宅の子どものための支援にも力を入れている。放射能を考える集会も実施。

大富教会

宿泊支援として教会を開放し、ボランティアを支えている。また、石巻市の牡鹿半島（鮎川/荻浜/給分浜など）での支援活動にも力を注ぎ、訪問などによる丁寧な寄り添いの働きを行なっている。宣教団や海外からのボランティアとの協働も多い。また、宮城学院の被災学生のためのサポート活動も行なっている。

南光台教会

地域に仕える教会として、震災の痛みを負う地域の方々を招いてコンサートを行なった。沿岸部での出張傾聴喫茶にも参加。超教派の被災支援活動のパイプ役にもなっており、吊いや放射能の課題などに取り組んでいる。

吉岡伝道所

宿泊支援として伝道所を開放。連盟派遣ボランティアや様々なボランティアのサポートをする働きを担っている。また、宿泊しているボランティアの方々も、吉岡伝道所やその地域のために様々な働きを担ってくださり、伝道所と地域との関係がより深くなってきている。沿岸部へ訪問なども行なっている。

山形教会

震災直後からお米の支援など、県を越えた支援を行なっている。特に、「裁縫道具セット」を大量に準備して石巻市の牡鹿半島の方々に供与し、大変喜ばれた。県は違うが、宮城チームの一員となり、祈りをもって支援活動に参加している。

酒田伝道所

震災直後から、仙台地区の教会に支援物資を送るなど、仙台地区の教会の働きを覚え、祈りつつ支援している。特に藤井牧師は、連合のメーリングリストを開設し、教会同士が情報共有するための基礎をつかった。山形教会と同じく、県は違うが、今後宮城チームの一員として情報を共有し、祈りを合わせていく。



鮎川浜支援活動（大富教会）

大富教会では震災から間もない4月上旬から、牡鹿半島の鮎川浜の被災者の方々に対する支援活動に取り組んできました。

鮎川浜は石巻市街から東へ30キロの所にある漁村です。古くは捕鯨基地として栄え、今も多くの方が漁業に従事されています。地震のあとの津波で壊滅的な被害を受けました。

私たちが鮎川浜の皆様との出会いは、教会員のお知り合いからの要請で、避難所になっていた清優館(老人保健施設)に支援物資をお届けしたことに始まりました。そこでSさんという漁労長のご家庭と出会い、津波の被害を免れた会社の寮で共同生活をしていた方々へと支援の輪が広がりました。その輪は大富教会の枠を超えて、海外の教会からの様々な力によって支えられてきました。



10月22日(土)には石巻市立牡鹿公民館で交わりの会を持ちました。パンコク福音教会からのメンバーはポップコーンカフェを催し、楽しいゲームで子ども達と遊びました。ハワイオリバット教会からのメンバーは珍しいスパムにぎりを提供して喜ばれました。そんな中、私たちは地震と津波、そしてその後の数日間をどのような気持ちで過ごしたか、お一人お一人の尽きないお話をゆっくりと伺うことができました。震災後の鮎川浜には薬局が一軒もないという切実な悩みがあることを知りました。今後も私たちにできる支援を通して、鮎川浜で主がご出会わせてくださる皆様とかがわっていきたく思います。

(大富教会：齊藤弘司)

◆今号に掲載していない被災県内の教会・伝道所の様子も、次号以降、順次お知らせしていきます。

荻浜・給分浜支援活動

連盟ボランティアにわが常盤台教会の青年会二人と応募した。14日(金)の16時に浦和の連盟本部に参集する。各教会の参加者と合わせて7名、連盟のワゴン車をお借りし、加藤常務理事、野口宣教部長、大城戸兄らの祈りに見送られて出発、東北道を一路北へと向かう。仙台の大富教会に着いたのは11時過ぎ。伊東兄らに温かく迎えられ会堂で一晩を過ごさせていただく。

翌朝7時に教会を立ち、給分浜方面に向かう。この地で連盟が継続的に支援していることは夏の壮年大会でも聞いていた。近くの月の浦に支倉常長像があり、慶長遣欧使由来の地である。この地を支援していることに歴史の縁、神のみ旨を感じる。

途中の石巻市内の随所にもこの浜にも倒壊した家屋などまだ津波の爪痕は残る。浜辺の一角に、プレハブの仮設住宅が建つ地区の集会場に車は着く。仙台の教会の方々とも合流して、金丸先生や堀野先生の指揮のもと、小雨模様だったが活動開始。



今日は皆さんに新鮮な青物の野菜をお配りして、お話しするひと時を持つという企画だ。トラックで運ばれてきた野菜を、みんなで仕分けして袋に詰めた。10時半になるとみなさんが集まってきて、野菜をお配りする。集会場では駄菓子屋コーナーも設置され、お子さんなどが喜んでいました。お茶を飲んで歓談のひと時を持つ。

個々に訪問して野菜を渡しご挨拶した。ささやかな贈り物なのに、みなさん心から感謝してくれてこちらも温かい気持ちになる。訪れてお話しすること自体が慰めになるのだと思う。「買い物に行くのも大変です。店がないし、震災後は行商の人も来なくなった。車がない私らが町まで行くバスは2時間に1本、片道千円もかかる。青物はありがたいです」。東京にいるとわからないが、被災地ではねぎ一本、ほうれん草一羽でも貴重なのだ。集会所に戻り地区長さんとお話をした。浜の伝統産業である牡蠣養殖の復活にける熱い思いをお聞きました。「牡蠣は百メートルの筏につるして育てる。震災前に200本あったのが今は10本。出荷には加工施設が必要だが、その建設だけで2億かかる。金が足りない」。地区長さんは先日、胃潰瘍で入院したという。気苦労もいかにばかりか。震災から七か月。人々は復活して立ち上がろうとしている。支援を続けたい。

(常盤台教会：大田雅一)